

ぼくのきもちの

え 絵・石橋富士子
いしばし ふ じ こ

きもち

きもち





①

〈タイトル〉

ぼくのきもち きみのきもち

◆ 本作品のねらい

本作品は、「相手への理解、相手を思いやる気持ちの大切さ」を主なテーマとして、いじめられている児童（シバ夫）と、いじめをしている児童（ブル太郎）の体（立場）が入れ替わることで、お互いの気持ちに気づき、理解し合う姿を描いています。

本作品を通じて、いじめ問題、そして「相手を思いやる気持ちの大切さ」について、子どもたちを考えるきっかけとしてもらうことが大きなねらいです。

◆ 読み方の工夫

① 聞き手の表情や反応を見ながら読みましょう。
顔が紙しばいの裏側にあると、声が聞き手に届きにくくなります。聞き手の表情や反応を見ながら読みましょう。

② できるだけ大きな声で、
ゆっくりと読むことを意識しましょう。

通常の会話のときよりも口を大きく開けて、ゆっくりと読むことを意識しましょう。ト書き（説明）とセリフの間は半秒くらいの間をあけることでメリハリのある実演になります。

③ 登場人物の感情を意識して読みましょう。

登場人物の感情に合わせて、喜怒哀楽などを意識して読みましょう。また、シバ夫・ブル太郎は子どもらしく、お母さんは大人らしく落ち着いた調子でなど、適度な演じ分けも効果的です。

※シーンごとの読み方・ぬき方などのポイントは、該当シーンの下段「実演ポイント」をご参照ください。





②

ここは、森の動物村。

村にはいろんな動物たちが住んでいて、みんなで仲よく暮らしています。

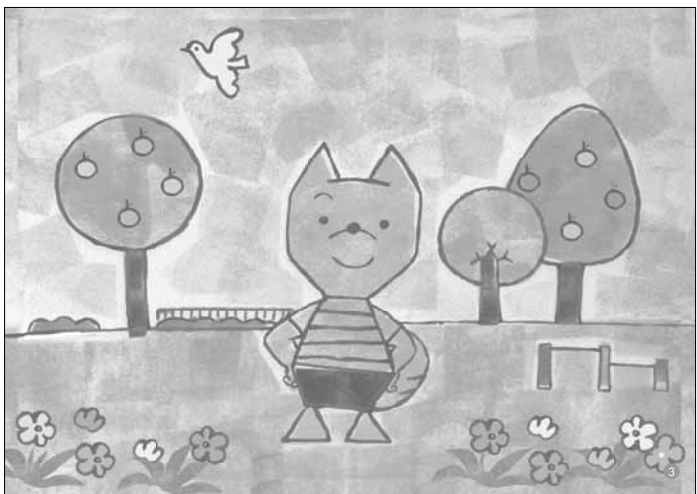
実演ポイント

▼導入は読者の

関心を促すため、

ゆっくり、ていねいに読む





③

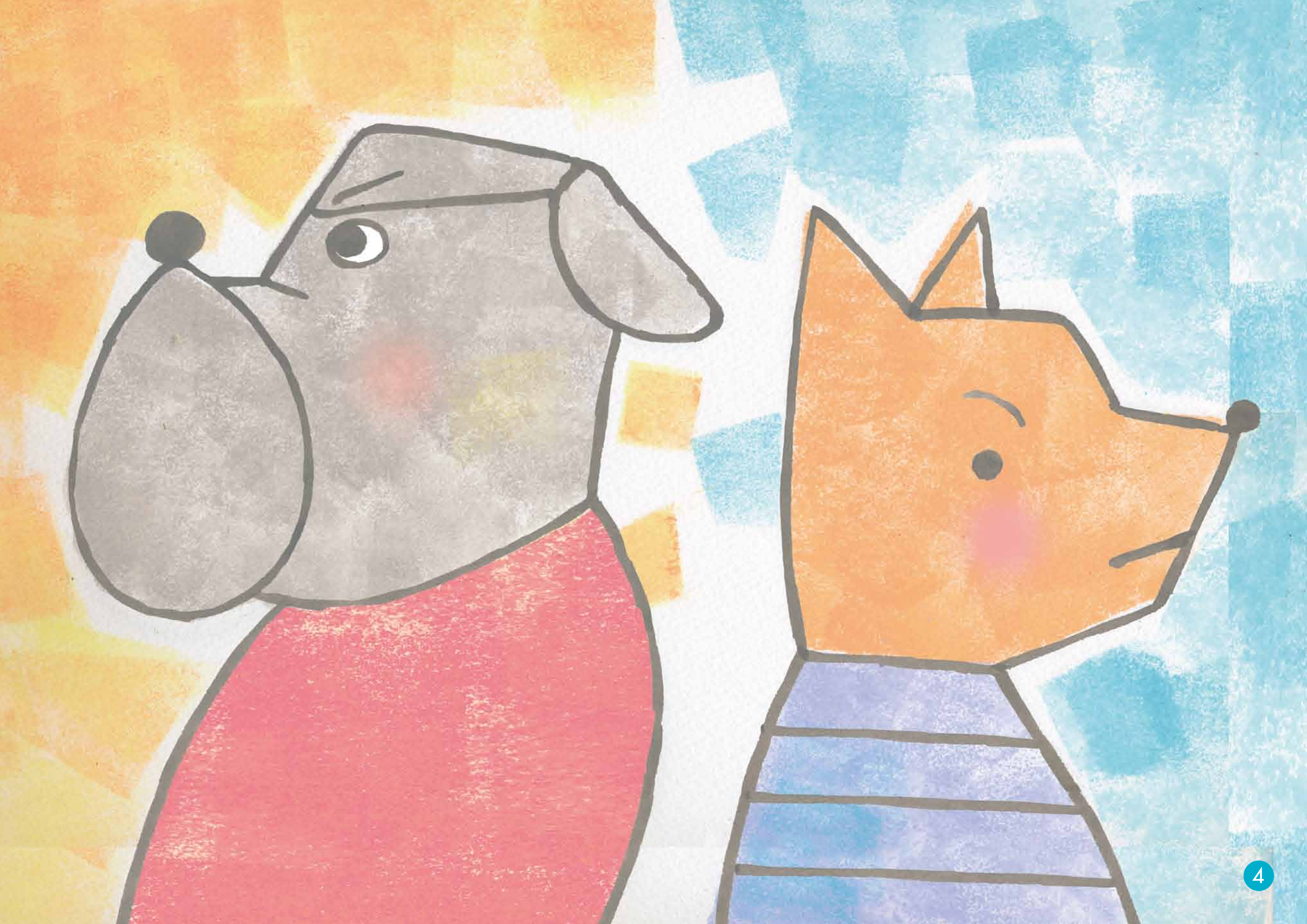
シバ夫^おは
森^{もり}の小学^{しょうがっこう}校^{ねんせい}の2年生^{ねんせい}。
心^{こころ}のやさしい
元気^{げんき}な男^{おとこ}の子^こです。

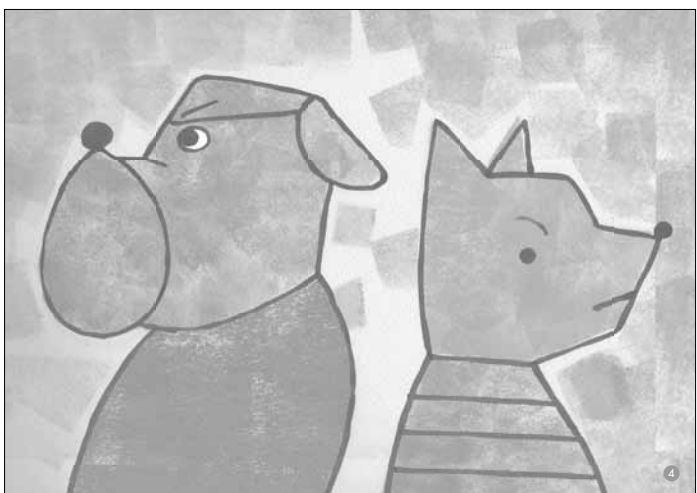
でも、そんなシバ夫^おには
ある悩^{なや}みがありました。

実演^{じつえん}ポイント

▼元^{げん}気^きに

▼しんみりと





④

それは同じクラスの
ブル太郎たちが
シバ夫を仲間はずれにすること。

ある日、
掃除をさぼっていたブル太郎を
シバ夫が注意したことで
ケンカになり、
その日から、
だんだんブル太郎とシバ夫の
仲が悪くなっていたのです。

実演ポイント

▼元気のない声で





⑤

それからというもの

ブル太郎^{たろう}は、

友達^{ともだち}のコン介^{すけ}やニャー子^こと一緒^{いっしょ}に、

シバ夫^おをからかったり、

イジワルをしたり

するようになりました。

クラスみんなも、

ブル太郎^{たろう}たちに

イジワルされるのが怖^{こわ}くて、

止^とめることができませんでした。

実演^{じつえん}ポイント

▼
じつえん





⑥

今日は、待ちに待った遠足の日。
2年生は森の向こうの丘まで
ハイキングに出かけます。

朝から森をずんずん歩いて、
丘の上に着いたところには
ちょうどお昼です。

(先生)

「ここでお昼ごはんにしましょう」

という先生の声に、
みんなはいっせいにお弁当を
広げました。

実演ポイント

▼場面転換を意識して、
はきはきと元気よく

▼みんなに呼びかけるように、
少し大きめの声で





⑦

シバ夫^おが丘^{おか}のてっぺんの
大きな石^{いし}に腰^{こし}かけて、
一人^{ひとり}でお弁当^{べんとう}を食^たべていると
ブル太郎^{たろう}がやってきて、
こう言^いいました。

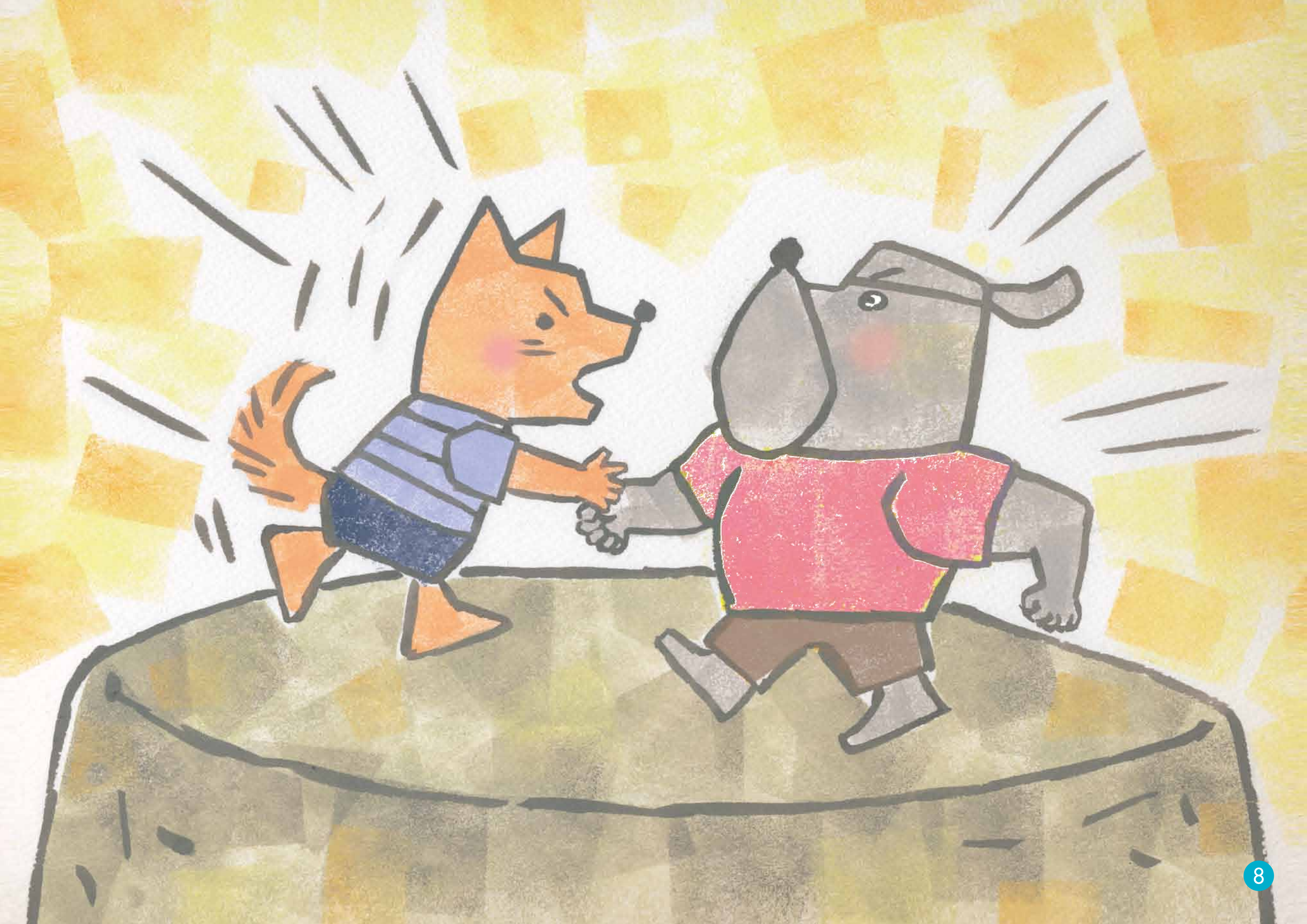
(ブル太郎^{たろう})

「ぼくのお弁当^{べんとう}は
お肉^{にく}にお魚^{さかな}がどっさり、
それにおやつ^{くだもの}の果物^{くだもの}もたくさん！
それに比^{くら}べて、
シバ夫^おのお弁当^{べんとう}は小^{ちい}さくて
全然^{ぜんぜん}おいしそうじゃないな！」

実演^{じつえん}ポイント

▼「どっさり」「たくさん」の
部分^{ぶぶん}を強調^{きょうちよう}

(イジワルそつな口調^{くちう}で)





⑧

いつもはイジワルされても
ガマンしていたシバ夫おですが、
大好きなお母さんかあが
つくってくれたお弁当べんとうを
からかわれて、

（シバ夫お）

「お母さんかあのお弁当べんとうを
バカにするな！」

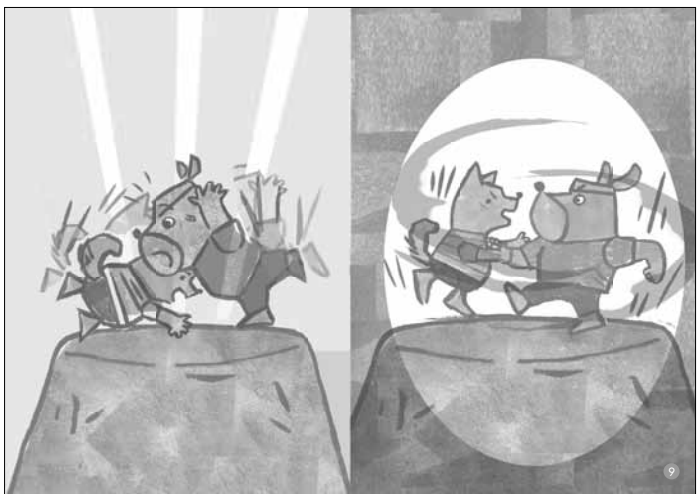
とブル太郎たろうにつかみかかりました。

— 半分はんぶんぬく —

実演じつえんポイント

▼ 大きめおおの声こえで





⑨

シバ夫^おとブル太郎^{たろう}は
お互^{たが}いに胸^{むね}をつかみあつて、
大きな石^{いし}の上^{うえ}で
グルグルと回^{まわ}ってしまいました。

実演^{じつえん}ポイント

▼大きめ^{おお}の声^{こえ}、強め^{つよ}の口調^{くちやう}で
少し早口^{すこはやくち}に読^よむ

—すばやく全部^{ぜんぶ}ぬく—

するとその瞬間^{しゆんかん}！

ピカーツと一瞬^{いつしゆん}
あたりが見^みえなくなるほど、
石^{いし}がまぶしく光^{ひか}りました。

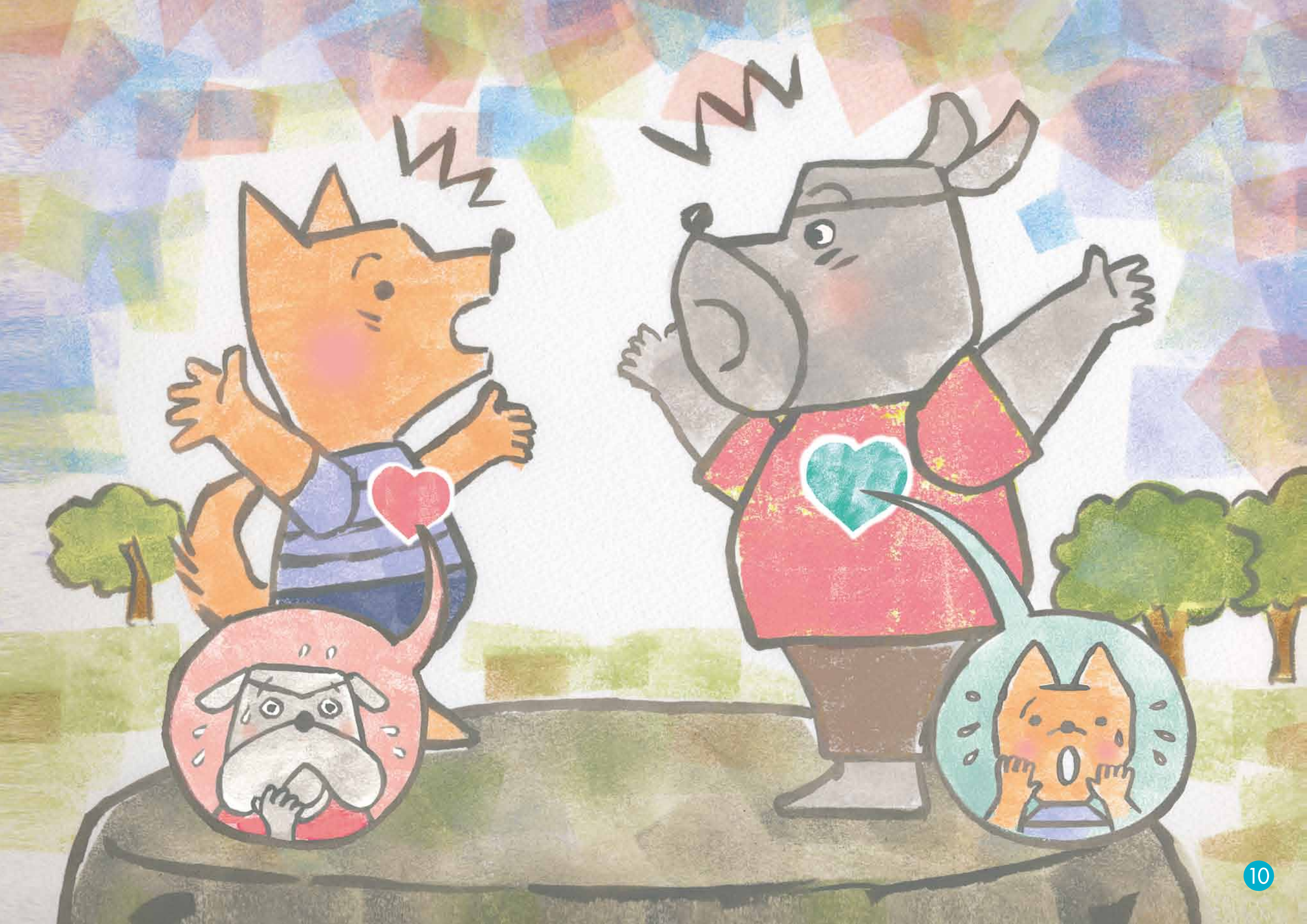
(シバ夫^おとブル太郎^{たろう})

「うわーっ！」

二人^{ふたり}はびっくりして
倒^{たお}れこみました。

▼抑揚^{おくやう}をつけて、

擬音^{ぎおん}やセリフを強調^{きやうきゆう}する





⑩

（ブル太郎たろう）

「びっくりした。なにするんだよ！」

（シバ夫お）

「そっちこそ！」

と二人は相手の顔をにらみました。

すると、

なんということでしょう！

そこには自分の姿が

あるではありませんか！

（シバ夫とブル太郎たろう）

「あれ、どうなってるんだ。

なんで目の前に僕がいるの!？」

実演ポイント

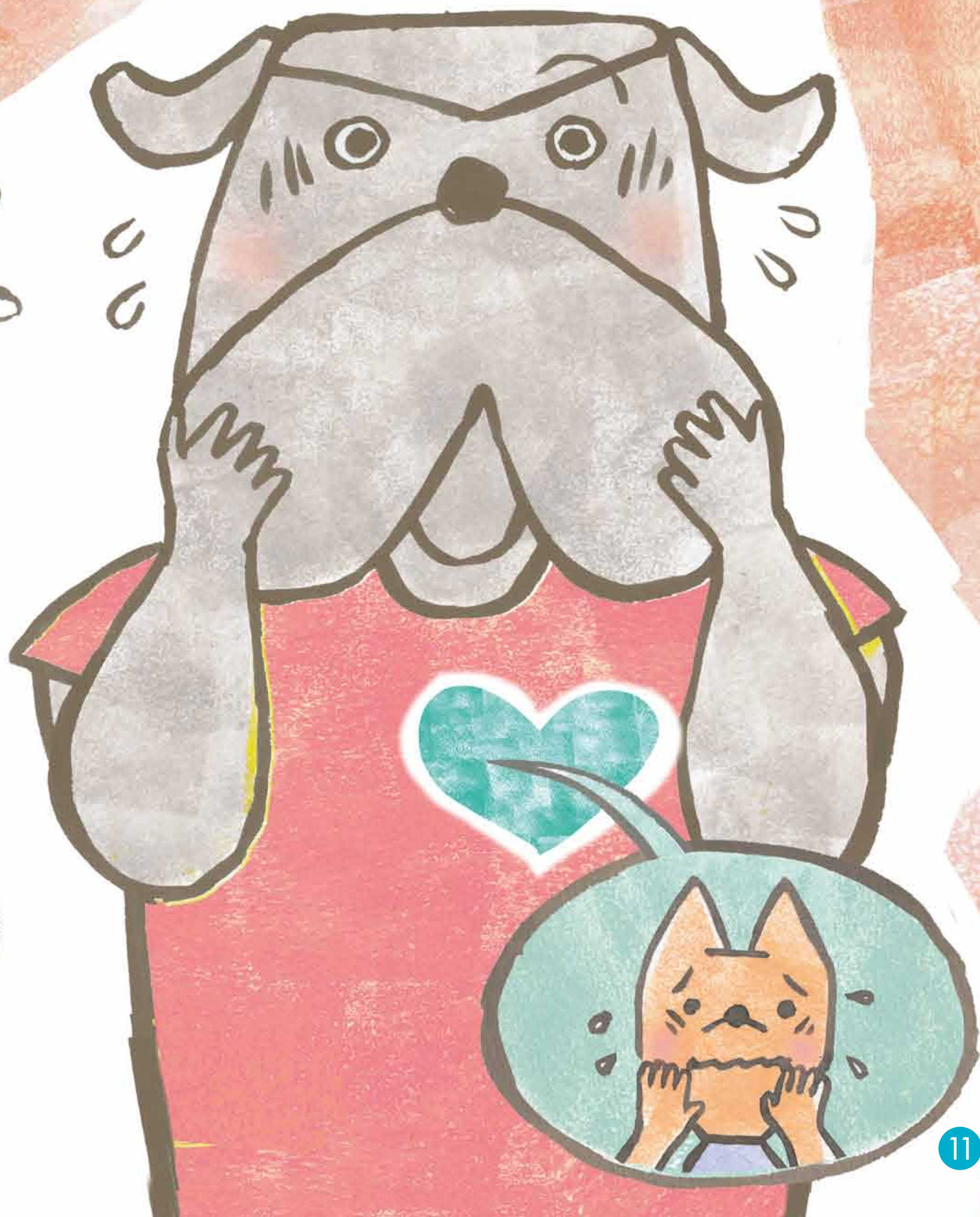
▼怒った口調で、

少し早口に読む

▼前のセリフと

十分に間をあけて

大きめの声で読む





11

シバ夫^おとブル太郎^{たろう}は
びっくり仰天^{ぎょうてん}！

あわてて自分^{じぶん}たちの姿^{すがた}を見てみると、
シバ夫^おはブル太郎^{たろう}に、
ブル太郎^{たろう}はシバ夫^おに
なっているではありませんか！

なんと二人^{ふたり}は丘^{おか}の上^{うえ}の
不思議^{ふしぎ}な石^{いし}の力^{ちから}で
体^{からだ}が入れ替^かわってしまったのです。

シバ夫^おになったブル太郎^{たろう}と
ブル太郎^{たろう}になったシバ夫^おは
お互^{たが}いの顔^{かお}を見合^{みあ}って叫^{さけ}びました。

（シバ夫^おとブル太郎^{たろう}）

「大變^{たいへん}だ。どうしよう！」

実演^{じつえん}ポイント

▼読者^{どくしゃ}が状況^{じょうきょう}を

理解^{りかい}しやすいように、

ト書き^が（説明^{せつめい}）は

ゆっくりと抑揚^{よくよう}をつけて読^よむ

▼大^{おお}きな声^{こえ}で





⑫

(ブル太郎)

「どうなってるんだ。
僕たち体が入れ替わっちゃった!」

(シバ夫)

「どうしたらもとに戻れるんだろう」

二人は今にも泣きそうです。

そのとき、

(先生)

「おーい。
きみたち何をしているんだ。
お弁当の時間は終わりだぞ」

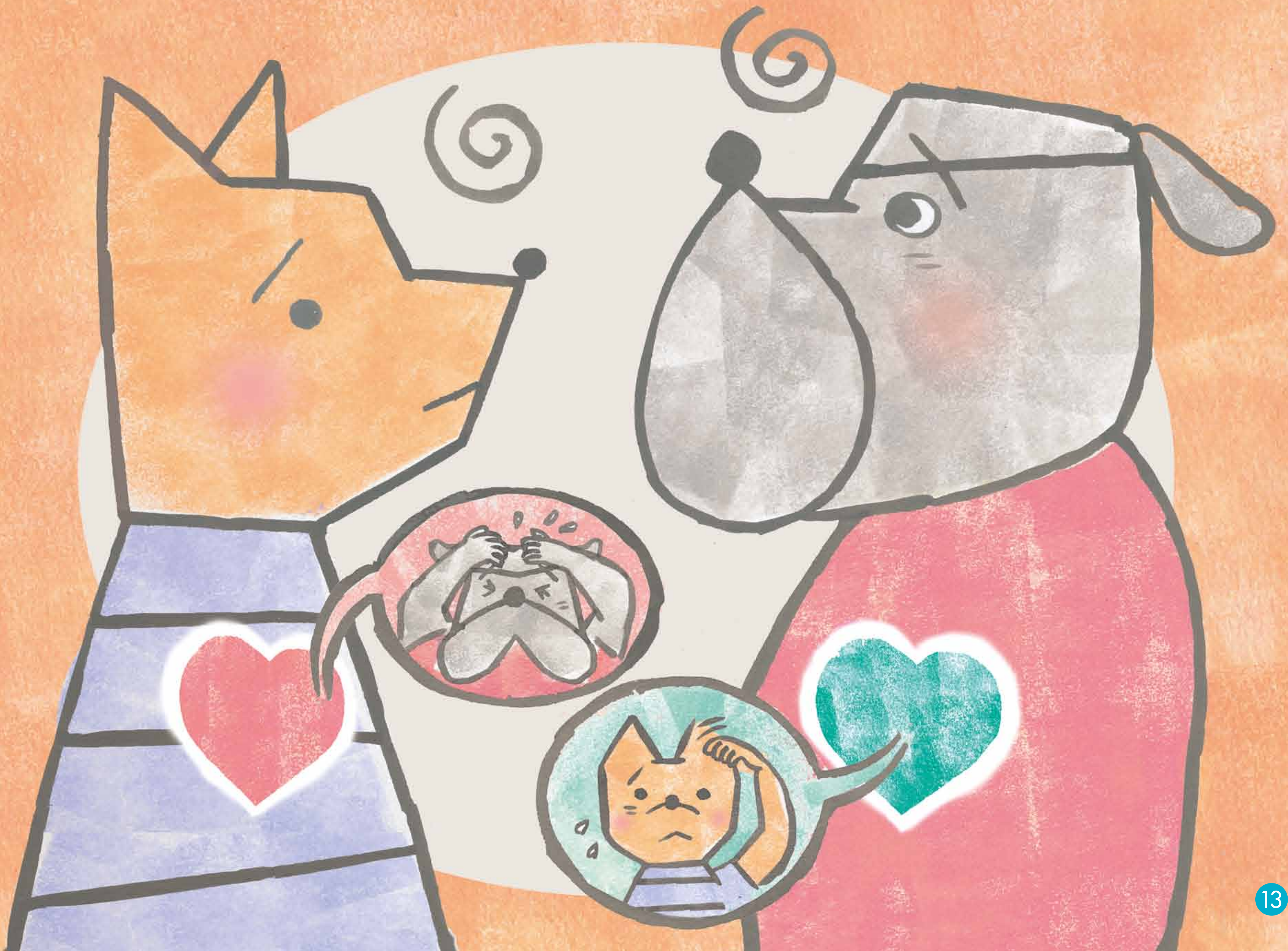
と先生が二人を呼びに
やってきました。

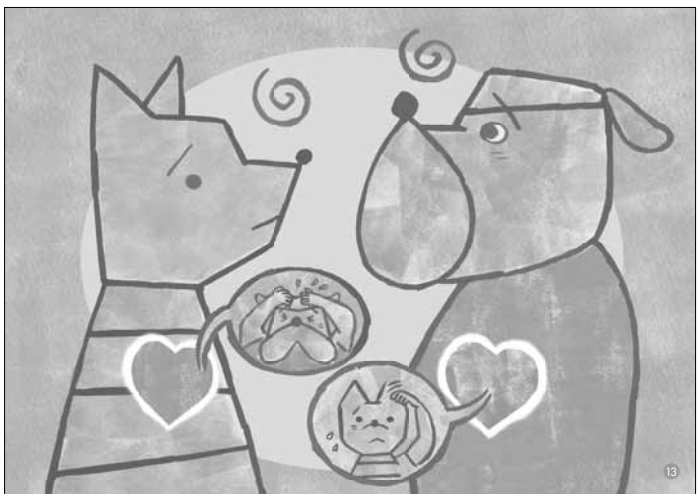
困ったシバ夫とブル太郎は
しかたなく、
そのままみんなのもとへ
戻ることになりました。

実演ポイント

▼泣きそうな声で

▼遠くから呼んでくるように
語尾をのびし気味に





⑬

帰り道、

(ブル太郎)

「もとに戻れるまで

このままの姿でいるしかないな」

と言うブル太郎に、
シバ夫も

(シバ夫)

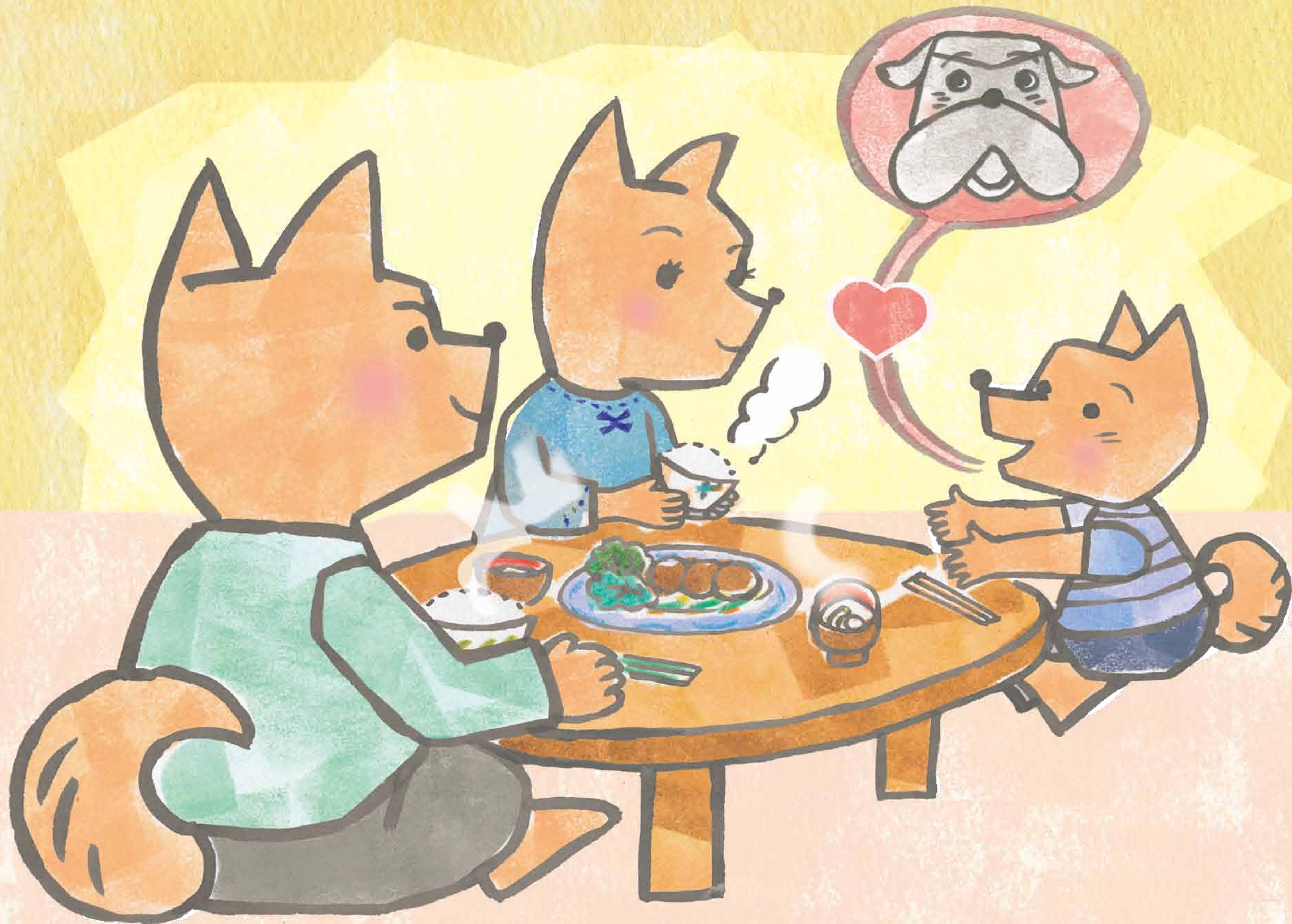
「そうだね」

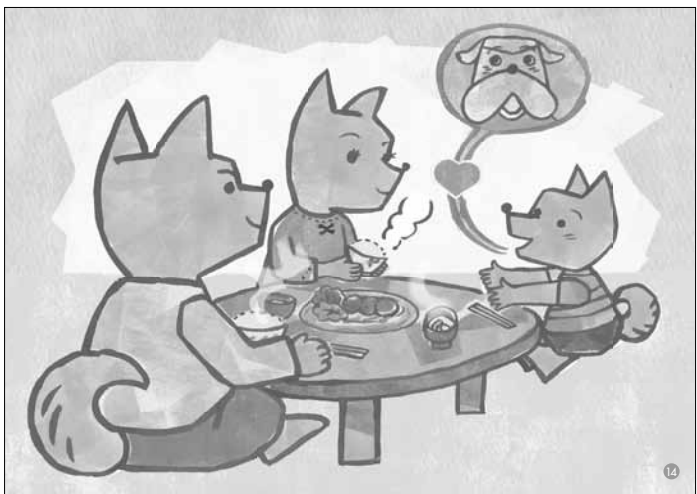
とうなづきました。

こうして、
ブル太郎はシバ夫の家へ、
シバ夫はブル太郎の家へ
帰ることになったのです。

実演ポイント

▼元気がない声で





14

シバ夫の家に帰ったブル太郎に、
お母さんは

(シバ夫のお母さん)

「遠足楽しかった?」

今日はうんとおいしいものを
つくるからね」

と晩ごはんの用意をしてくれました。

それはいつも食べている
豪華なおかずでは

ありませんでしたが、

やさしいお母さんとお父さんと

一緒におしゃべりしながらの

食事のひときは、

ブル太郎が忘れかけていた、

とても楽しい時間でした。

実演ポイント

▼やさしく語りかけるように

▼ゆっくりと楽しげな声で





15

ブル太郎の家に帰ったシバ夫は、
大きなお屋敷にびっくり！

テーブルには
晩ごはんのお肉やお魚が
どっさり並べられていました。

でも、
ブル太郎のお母さんとお父さんは、
シバ夫が帰ってきたことに気づかず、
ケンカの真っ最中。

晩ごはんの間も
お母さんとお父さんは
まったく口をきかず、
ずっと黙りこんだままです。

シバ夫はどうしていいかわからず、
ごはんを食べ終わると、
ブル太郎の部屋に戻り、
すぐにベッドに潜り込みました。

実演ポイント

▼「びっくり」「どっさり」
の部分強調

▼おどろいたように
ややゆっくりと





16

つぎの日、

シバ夫^おになったブル太郎^{たろう}が

学校^{がっこう}に行くと、

コン介^{すけ}とニャー子^こが

いつものようにからかってきました。

ブル太郎^{たろう}はやり返^{かえ}そうとしましたが、
二人^{ふたり}が相手^{あいて}ではとてもかかないません。

それを見ていたシバ夫^おは、

いつもイジワルしてくるブル太郎^{たろう}が、

コン介^{すけ}とニャー子^こにからかわれて

いい気味^{きみ}だ

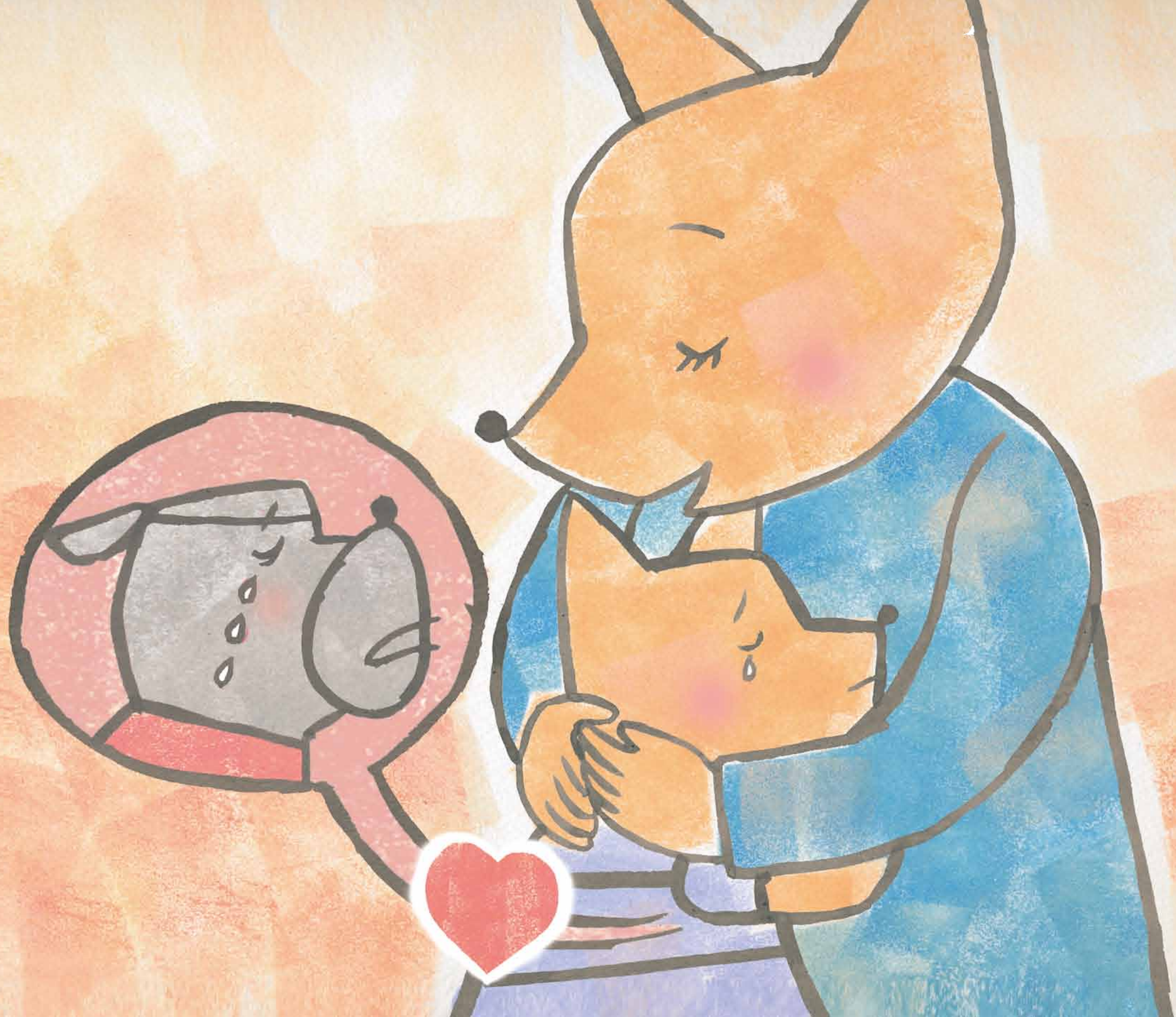
と思^{おも}いました、

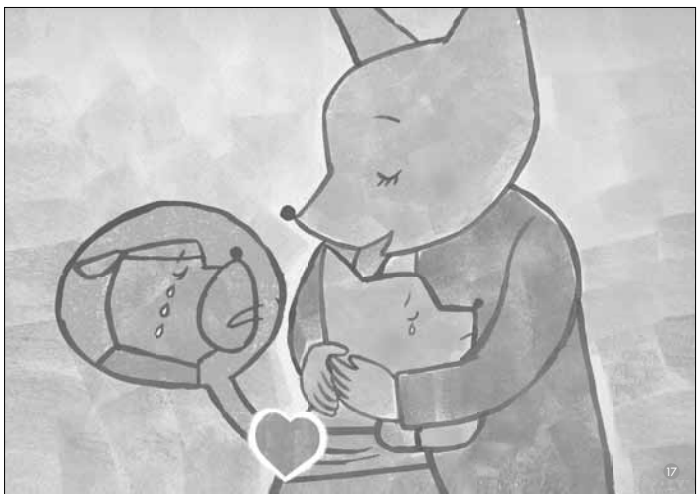
どこか心^{こころ}がスッキリしませんでした。

実演^{じつえん}ポイント

▼かなしそつに

▼イジワルそつな口調^{くちう}で





①7

その日、
生まれてはじめて
いじめられたブル太郎が
悲しい気持ちで家に帰ると、
それを見たシバ夫のお母さんは

(シバ夫のお母さん)

「どうしたの？
学校でなにかあったの？」

と言いい、
そっと抱きしめてくれました。

ブル太郎は
こらえていた涙がどつとあふれ、
お母さんの胸の中で
わんわん泣きました。

そのときはじめて
シバ夫はいつも
こんな気持ちだったんだ
と気づき、
自分がいままでしてきたことを
とても後悔したのです。

実演ポイント

▼やさしく語りかけるように

▼かなしそうに





一方、シバ夫は家に帰っても心がモヤモヤしたままで、ごちそうを食べてもブル太郎のゲームで遊んでも、ちっとも楽しい気持ちになれません。

ふとブル太郎の机を見るとノートの端の落書きが目に入りました。

そこには

「お母さんとお父さんは

いつもケンカばかりで、

僕の話聞いてくれない」

イライラして

友達をからかってしまうけど、

全然心がスッキリしない」

というブル太郎の

本当の気持ちが書かれていました。

（シバ夫）

「ブル太郎も

いろいろ悩んでいたんだな。

あいつはいつも

こんな気持ちでいたんだね……

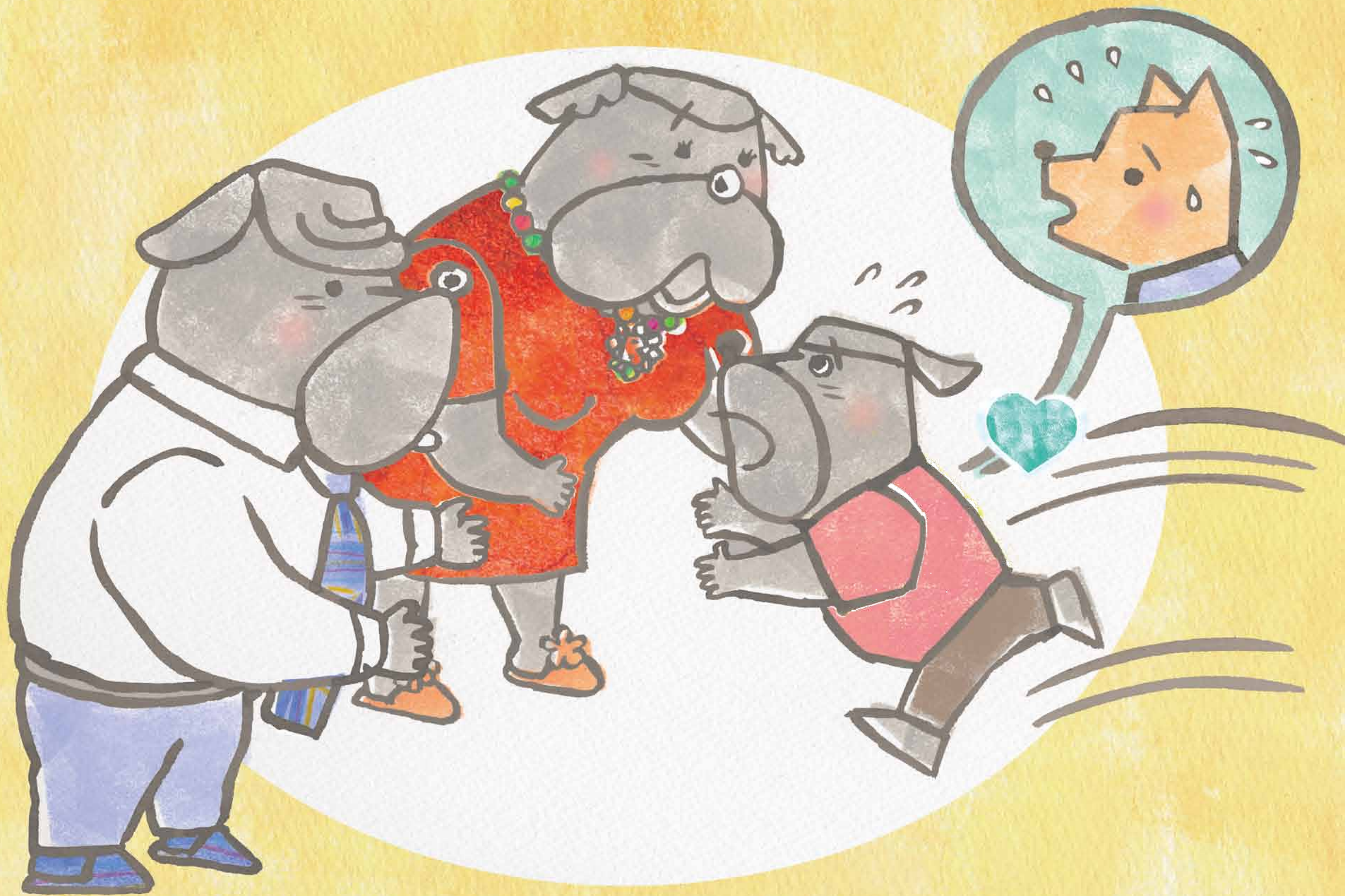
よし、

なんとか助けて

あげなくちゃ!!」

▼弱弱しい声でめくくうと

▼やさしい口調から
徐々に力強く





19

そう心に決めたシバ夫は
そのまま部屋を飛び出し、
勇気をふりしぼって
ブル太郎のお母さんとお父さんに
叫びました。

(シバ夫)

「お母さん、お父さん、
ケンカをやめてよ。
ぼくの話も聞いてよ！」

それは、いままでブル太郎が
言えなかった言葉でした。

シバ夫の一生懸命な姿を見た
お母さんとお父さんは、
ハッとして、

シバ夫にかけよりました。

(ブル太郎のお母さんとお父さん)

「いままでブル太郎の気持ちに
気づかなくてごめんね」

そう言うと二人は、
シバ夫をギュッと
抱きしめてくれました。

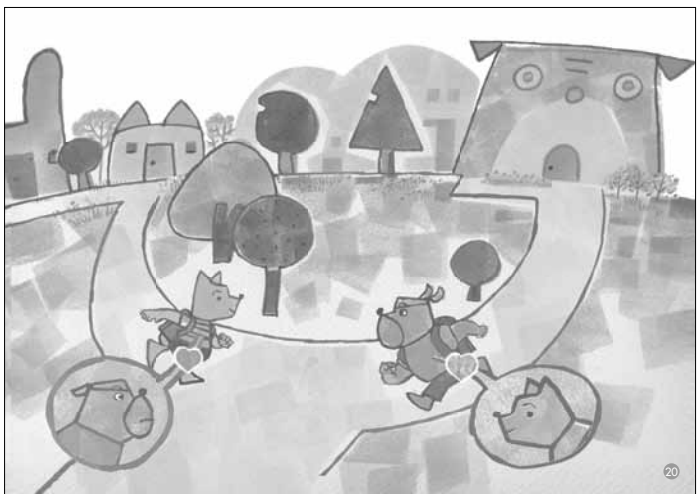
実演ポイント

▼叫ぶように大きめの声で

▼泣きそうな声、

やさしく口調で





②0

つぎの日の朝、ブル太郎とシバ夫は
どちらからともなくお互いを
呼びに行くために家を出ました。
そして、お互いの家のちようど
真ん中の道でばったりと出会った
二人は、相手の顔をじつと見て、
大きくなづき合いました。

（ブル太郎）

「森の丘の不思議な石のところに
行こう。そこでもう一度
二人でもとの姿に戻ろう。
早くお母さんに会いたいよ」

とブル太郎が言うと、シバ夫も

（シバ夫）

「そうだね。ぼくも家に帰りたい」

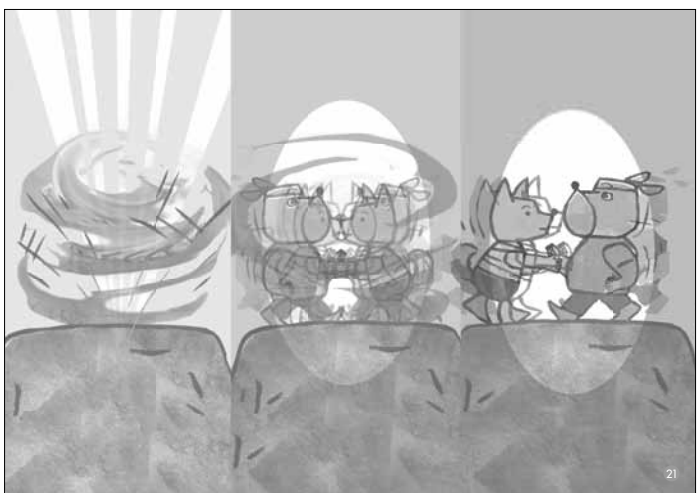
と元気に答えました。

―次ページを右に―ここまでぬく―

実演ポイント

▼はきはきと元気に
やや大きめの声で





21

丘おかのてっぺんに着ついた二人ふたりは、
不思議ふしぎな石いしの上うへに立たって
向むかい合あいました。

じつえん
実演ポイント

—さらに3分の^{ぶん}1ぬく—

そして、お互い^{たが}に相手^{あいて}の胸^{むね}に手^てを当^あて、
「いっせーのーせ」で
グルリと回^{まわ}つてみました。
でも、なにも起^おきません。

(呼^よびかけ)

みんな、二人がもとに戻れるように
応援してあげようか。

「一緒に『いっせーのーせ!』って言ってあげようね。」

いくよ、「いっせーのーせー!」。

あれれ、みんなの元氣げんきが足りたないから、

ふたり
二人がもとに戻れないよ。

もう一度、^{いちど}いくよ、「いっせーのーせ!!」

—すばやく全部ぬく—

グルッ！　グルッ！　グルリ！
その瞬間！
ピカーッ！！　と不思議な石が
まぶ　かがや　眩しく輝き、
ふたり　ひかり　つつ
二人は光に包まれました。

▼顔かおを読者どくしゃの方ほうへ向むけ、

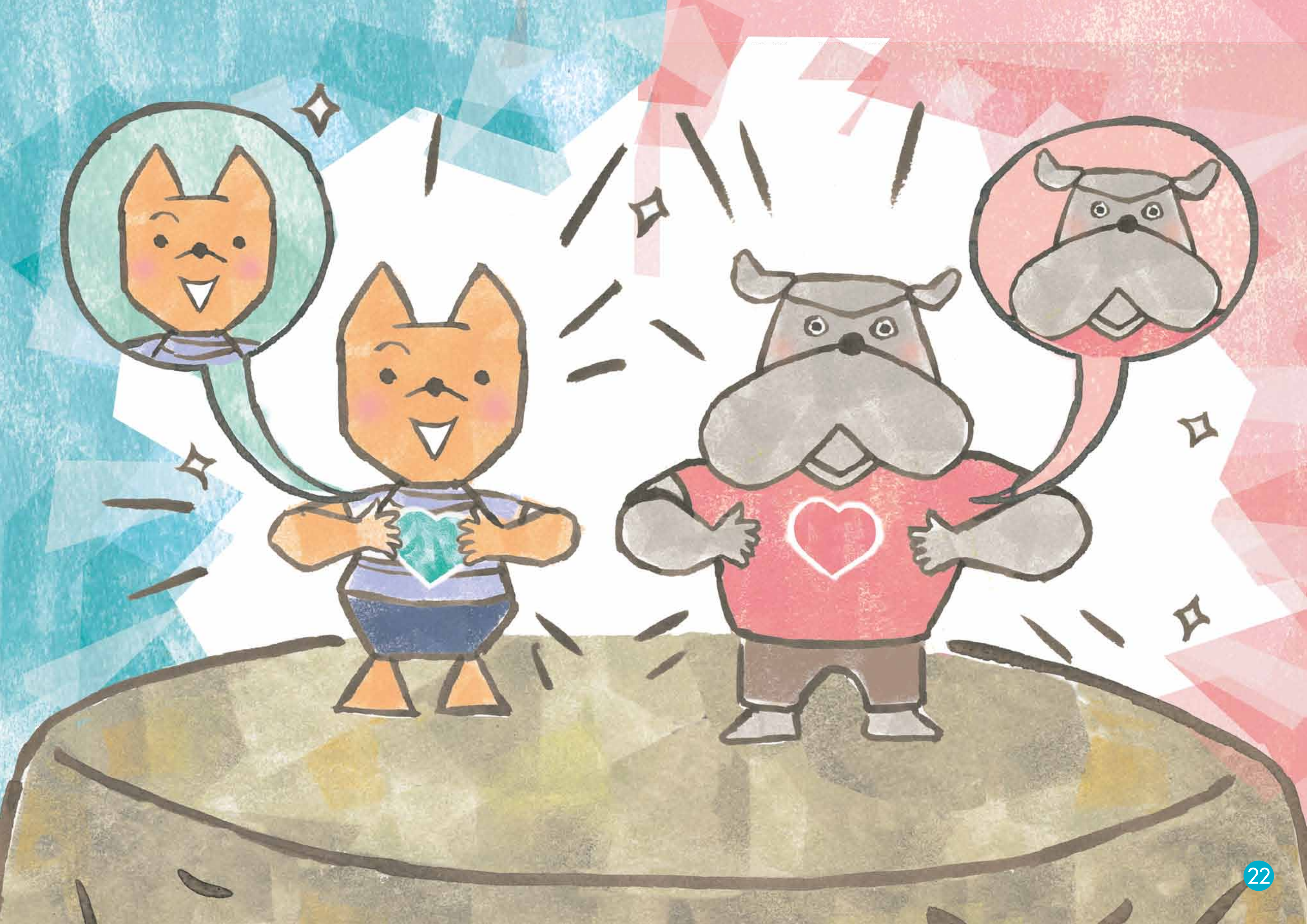
読者（会場全体）を

見渡しながら呼びかける

※**雰**^{ふん}**圀**^い**気**^きを**盛**^も**り****上**^あ**げ****る****た****め****に**、

身振り手振りなどを

加^くえ^わるのも良^よいでしょう





②②

光^{ひかり}が消^きえ、
シバ夫^おが目^めをあけると、
そこにはブル太郎^{たろう}の姿^{すがた}が見^みえました。

二人^{ふたり}はもとに戻^{もど}れたのです。

(シバ夫^お)

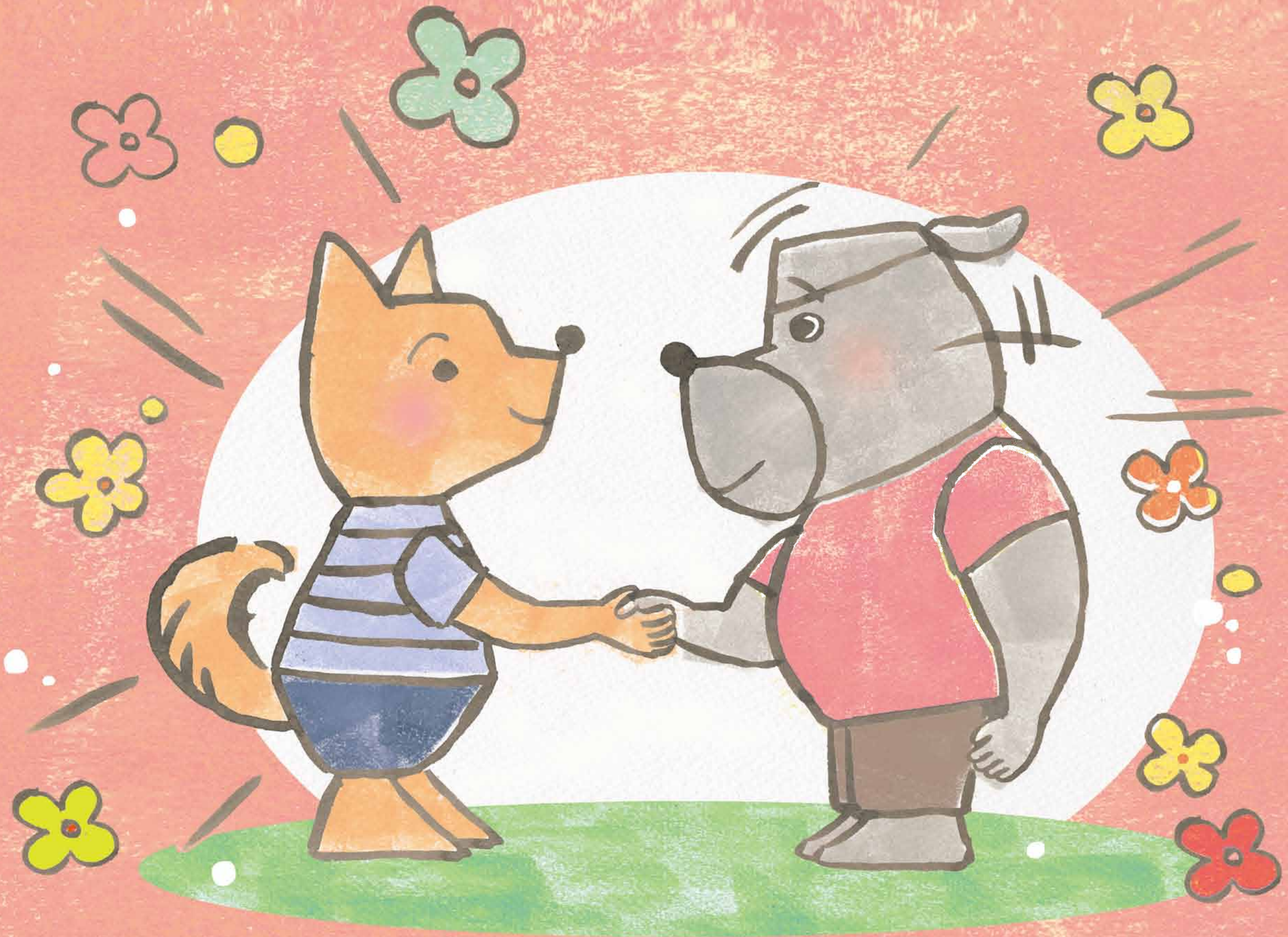
「やったね、ブル太郎^{たろう}！」

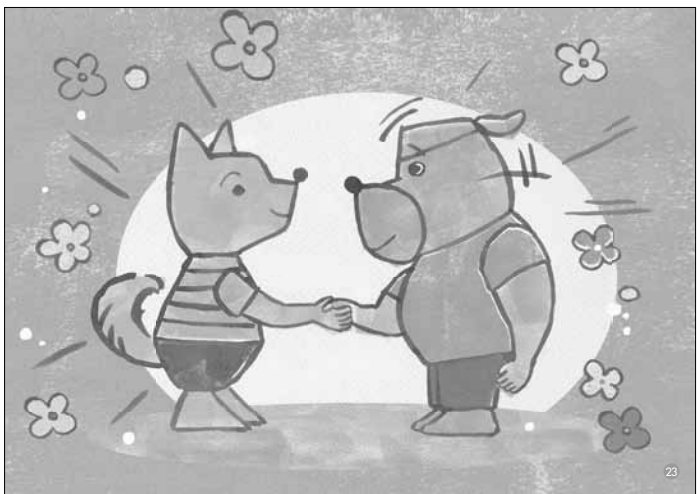
(ブル太郎^{たろう})

「すごいね、シバ夫^お！」

実演^{じっえん}ポイント

▼元氣^{げんき}よく大きめ^{おお}の声^{こえ}で





②3

ブル太郎は、
シバ夫の目を見てこう言いました。

（ブル太郎）

「いままで、イジワルしてゴメン。
ぼくもはじめて
いじめられる気持ちがあったよ。
あんなことしちゃダメだって
分かってたんだけど、
心がムシヤクシヤして、
それをシバ夫にぶつけて
しまっていたんだ」

（シバ夫）

「いじめられていたぼくの気持ちを
分かってくれたんだね。
体が入れ替わってみて、
ぼくもきみが辛かったことが
分かったけれど、だからといって、
いじめは悪いことだね。
それを分かってくれたんだから、
もう仲直りしよう」

とシバ夫がニツコリ笑うと、

（ブル太郎）

「ありがとう」

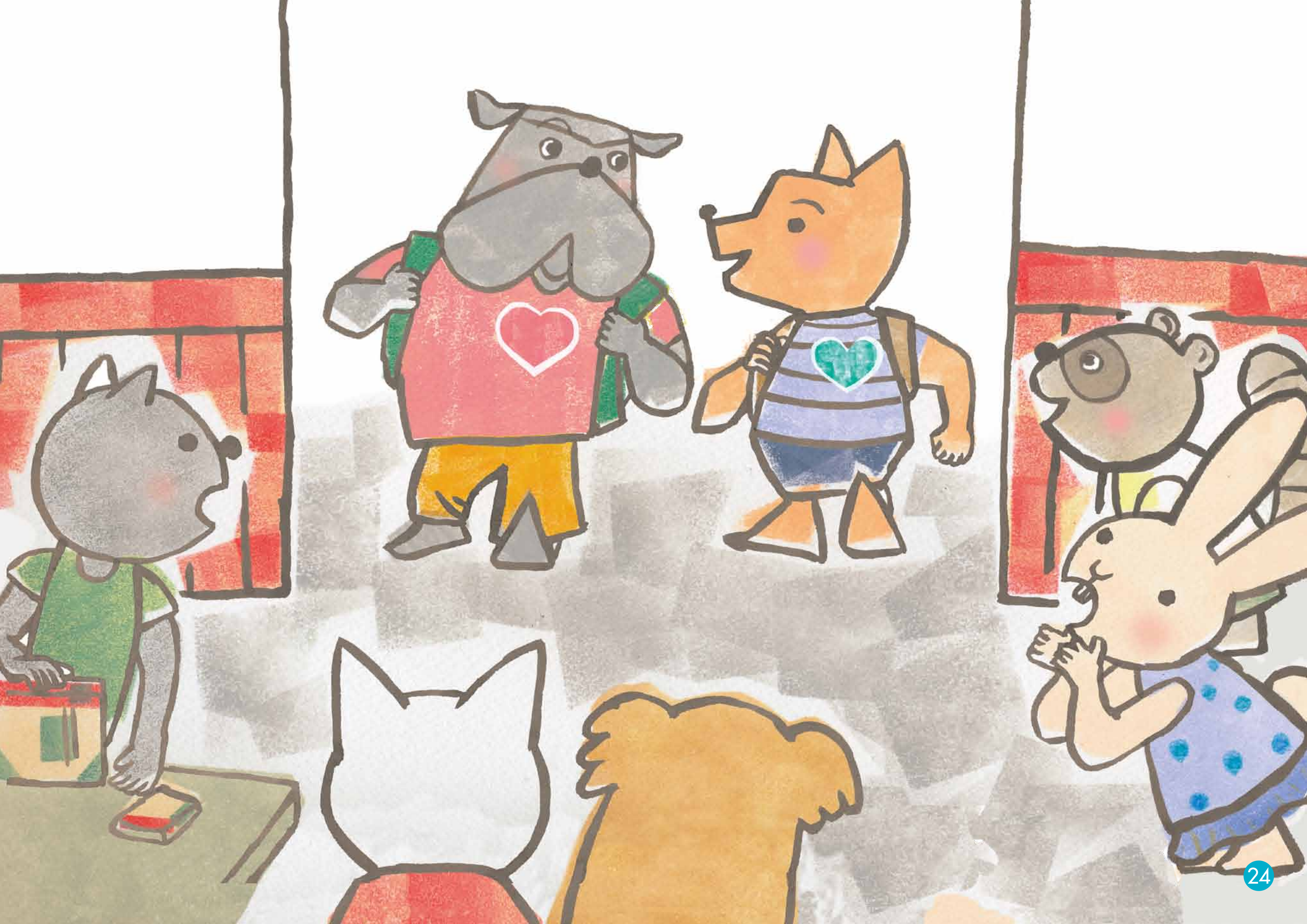
とブル太郎も笑い返しました。

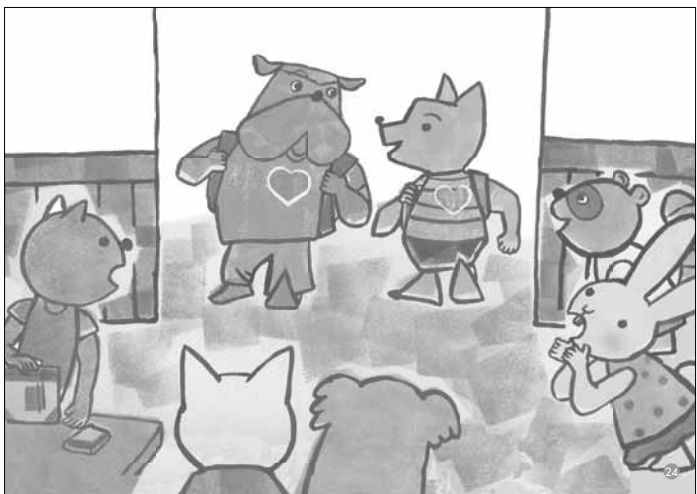
実演ポイント

▼読者の感情移入を

促すように、

抑揚をつけてゆっくりと読む





24

ふたりが仲良く学校へ行き、
教室に入ると、

それを見たクラスのみんなは

目を丸くして驚きました。そして

「仲直りしたんだね」と言いながら、

二人の周りに集まってきました。

ブル太郎はみんなに言いました。

（ブル太郎）

「今までいやな思いをさせて

ごめんね」

それを聞いたみんなも言いました。

（クラスのみんな）

「わたしたちだって、

あやまらなくちゃいけないね。

今まで勇気がなくて

知らんぷりをしてしまっていたの。

シバ夫くんごめんなさい」

それを聞いていた

コン介とニャー子も大きくうなづいて

（コン介とニャー子）

「ぼくたちもあやまらせて！

シバ夫、みんな、

今まで本当にごめんなさい」

そう言っで一緒に

輪の中に入ってきました。

実演ポイント

▼セリフとト書き（説明）に

メリハリをつけて読む

セリフはやや大きめの声で





25

こうして、

みんなが仲よしのクラスが
戻ってきました。

もうだれもイジワルしたり、
からかったりする子はいません。

なぜってみんなが

いじめなんてしてはいけな
いと思っ
たからですよ。

実演ポイント

▼読者に語りかけるように
ゆっくりと

(おしまい)

【読んだあとに聞いてみましょう】

質問を行う際には、子どもたちが感じたこと、考えたことを自発的に発言できるように十分に配慮しましょう。

《質問1》

紙しばいを観てどんな感想を持ちましたか？

【質問のねらい】

●どの場面が印象に残ったかを考える

●自分たちと同じだと思う部分、また違う部分について考える

《質問2》

自分がシバ夫の立場であつたら、又は、クラス
のみんなの立場であつたら、どうしますか？

【質問のねらい】

●もし自分がいじめられたらどうするか、また友達が
いじめられていたらどうするかを考える

《質問3》

体が入れ替わっている時、シバ夫の姿のブル
太郎がいじめられているのを見て、シバ夫は
どういう気持ちでいたのでしょうか？

【質問のねらい】

●見て見ぬふりをしてしまったことを考える
●いじめは、仕返しなどでは、解決しないことに気
づかせる

《質問4》

ブル太郎は、学校でいじめられたあと、シバ
夫のお母さんに抱きしめられたとき、どうい
う気持ちだったのでしょうか？

【質問のねらい】

●自分がお母さんやお父さんに抱きしめられたらど
んな気持ちになるかを考える

●自分がされていやなことを友達にしてみた
時、どんな気持ちになるかを考える（後悔や反省
の気持ちに気づかせる）

《質問5》

①いじめはいついつ起きると思いますか？
（いじめをいついつはいつけないと諭した上で）

②いじめはなぜいつけないと思いますか？

【質問のねらい】

●いじめが起きる原因といじめをしてはいけない理
由を自分で考えることで、子どもたちに「いじめ
はいけないことである」ことを深く認識させる

《まとめ》

【質問5を受けて】

子どもたちが発表した内容を取り上げながら、それ
らを一人ひとりが心に刻み込んでおけば、いじめが
起きない、楽しい学校生活を送れることを伝え、締
めくくる